

群 教 ゼ	G10 - 01
	平14.206集

助け合おうとする心情を育てる 道徳指導の工夫

総合的な学習の時間の「ブラインドウォーク」と関連させて

特別研修員 野村 聡子

《研究の概要》

本研究は、道徳の時間を総合的な学習の時間と関連させて、助け合おうとする心情を育てる道徳指導の工夫について、実践的に研究したものである。具体的には、総合的な学習の時間の「ブラインドウォーク」から相手を信頼することの大切さを学んだ体験と関連させて、道徳1におけるお互いの気持ちや立場を考えようとする学習、道徳2における相手の立場を考えて助けようとする気持ちを高める学習を中心に実践を行った。

【キーワード： 道徳 小学校 助け合い 総合的な学習の時間 体験学習】

主題設定の理由

私たちは、人との関わりの中で生活している。相手の特徴、立場や意見の違いをお互いに認め合うことで、心が通じ合い、信頼が生まれる。信頼関係が築かれると、互いに助け合い、自分が困ったときにも支えになってくれ、真の友情を育てていくことができる。本当の友達とは、困難に出会ったときこそ真価が問われる。困難に直面した際、互いに信頼し、支え合い、苦しみを共に乗り越えられるのが本当の友達である。この時期の児童は、最も活発に活動し、行動範囲や対人関係も広がり、友達とのトラブルなども増えてくる。また、まわりの状況を理解し判断する力や内省する心も育ち、自主性の芽生えなども感じられるようになってくる。以上のような点からその後の社会生活を支えていく基盤作りのために、心豊かに人とかかわる心情を育成していくことがこの時期とても大切である。

本学級の児童（小学校3年 男子19名 女子14名）は、3年生という発達段階において、いまだ自己中心的で相手の気持ちを考えられない児童が多い。そのため、友達が困っていても助けられないことがまま見られる。5月に学級活動で行った構成的グループエンカウンターシェアリングでは「一人ではできないけれど、みんなで考えてできてうれしい」と感想を述べた子が多かった。また、道徳の時間では、「自分がいやなことは友だちにやらないようにしたい」という感想をもっている児童が多い。児童が考える「助け合い」とは、単に「人を助ける」ということで、相互関係で成り立っているという意識は低いようである。日常生活で助けてあげたりもらったりしているにもかかわらず、そのような経験がないと答える児童も少なくない。人からしてもらうことが当たり前で意識せずうれしいと感じないため、友達にもしてあげようという気持ちになれずにいる。また、友達を信頼してうれしかったことや、友達に助けてもらった・あげたという経験が少ない児童も見られる。

そこで、まず、相手の気持ちや立場を考える道徳の授業を行い、その実際の活動の場として総合的な学習の時間にブラインドウォークの体験活動を行う。体験することで経験の少ない児童が、相手のことを考えようとする気持ちをもつことができると考える。次に、体験から得た気持ちを深めるために、自分を犠牲にしてまで友達を深く思いやる気持ちを考える道徳の授業を展開することで、相手の立場を考えて助けようとする気持ちをもつことができるであろう。

このように常に相手の気持ちや立場を考え、自分の姿を振り返る活動を通して、助け合おうとする心情を育てることができると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

道徳「助け合い」〔信頼・友情 2 - (3)〕において、道徳1での、相手の立場や気持ちを考える学習、総合的な学習の時間「ブラインドウォーク」での、相手を信頼することの大切さを実感する活動、道徳2での、相手のことを深く思いやる気持ちを考える学習を通して、助け合おうとする心情を育てることを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

1 道徳1【資料名「のれたよ、のれたよ、自転車のれたよ」】において、目の不自由な主人公とそれを見守る人の両方の立場からとらえた気持ちを基に話し合い、主人公の母親に手紙を書くことを通して、より相手の立場や気持ちを実感できるであろう。

2 総合的な学習の時間「ブラインドウォーク」において、友達と組になって目の不自由な人の立場と案内する立場を体験し、自分たちの活動をビデオで視聴後感想を書くことにより、目隠しをしている立場では友達を信頼することの大切さに気づき、案内する立場では相手の気持ちをより深く考えた行動をする意味を理解することができるであろう。

3 道徳2において、導入部で前時の体験を想起し、【資料名「いのりの手」】において、自分を犠牲にしてまで相手を思いやる心情や、その友人に感謝を表した行動の理由を基に今の自分を振り返らせる。続いて、助けてもらった木、助けてあげられた木を育てていくことを目標として意識させることによって、日常生活にお

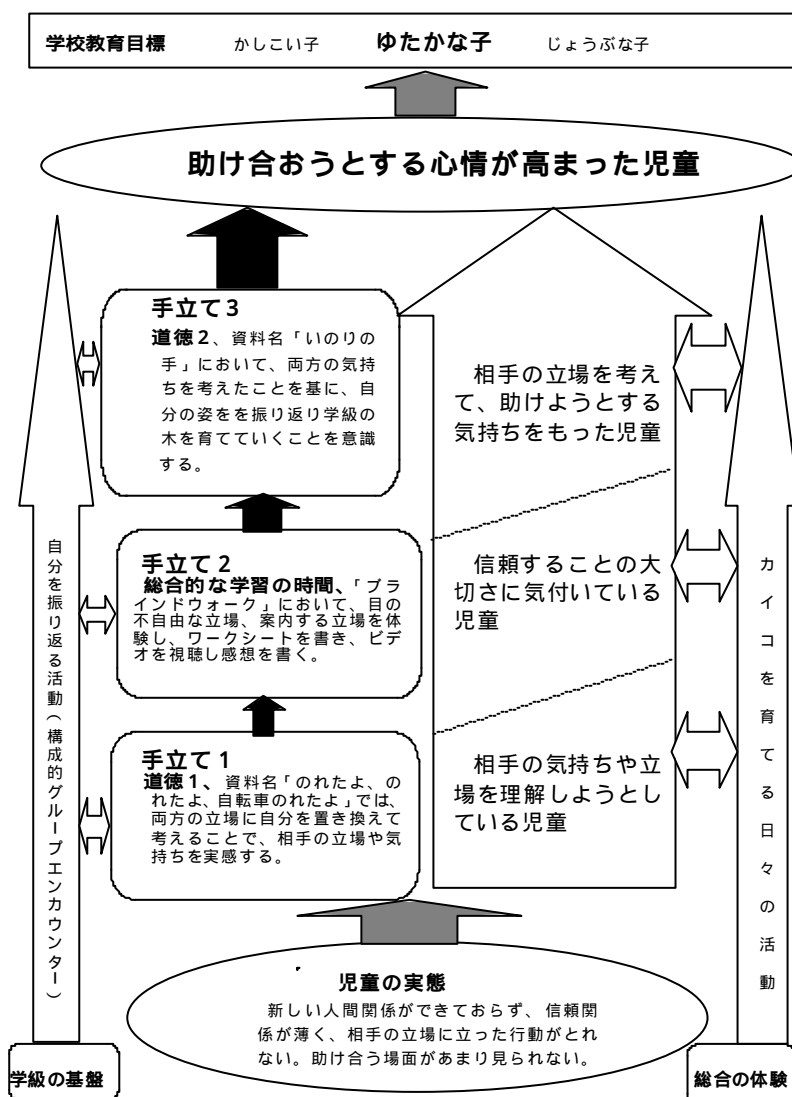


図1 全体構想図

いても、相手の立場を考えて、助けていこうとする気持ちをもつことができるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 目指す児童像

助け合おうとする心情が育った児童とは次の ~ のようである。

相手の立場や気持ちを理解しようとしている。

自分のよさや相手のよさを認めている温かな人間関係を築いた上で、その時の状況に応じて相手が今どんな気持ちでいるかを自分のこととしてとらえ、相手の気持ちや立場を受け入れようとする意識をもっている。

信頼することの大切さに気付いている。

友達同士で異なる立場を理解し、自分のことを認めてくれている相手にすべてをゆだねて行動し、相手がそれに十分応えてくれたという喜びや満足感などをもつことができる。また、相手が自分にすべてをゆだねて行動したときに、相手にも十分応えてもらったという喜びや満足感を与えることができる。

相手の立場を考えて、助けていこうとする気持ちをもつ。

他人にしてもらってうれしかったという経験を十分にしそれを意識することで、同じことをしたら相手も喜ぶであろうという気持ちをもつことができる。そして人と人とのつながりを意識し、自分が今できることを考えて、日常の場面でどんな相手に対しても喜んで自分の経験を行動にうつすことができる。

(2) 総合的な学習の時間「ブラインドウォーク」との関連

総合的な学習の時間における「ブラインドウォーク」では、三人一組になり、案内役が目隠しをした子の行きたい場所へ連れて行く活動である。三人が、目隠しする役、案内する役、それを見守る役を交代で行った後に、全体でビデオを視聴し「ブラインドウォーク」を振り返って感想を書き、その価値を全体で考えていく。そして、目の不自由な人の気持ちを考えたり社会の生活環境について実感させたりする活動である。

目隠しをしている立場では、何も見えない状態での恐怖や不安感、不便さを体験する中で、相手を信頼することの大切さを実感し、助けてもらってうれしかったという気持ちをもつことができる。案内する立場では、相手の気持ちを考えて行動し、助けてあげられたという充実感をもつことができる。ビデオ視聴の際や観察する立場では、客観的に両方の立場を振り返ることができる。相手の気持ちを考える体験や相手を信頼することの大切さに気付く体験、助けてあげられた喜びを感じる体験などから、助け合うときに感じる気持ちを実感できる。ブラインドウォークの前後には、「助け合い」についてのイメージマップを作成する活動を行い、「助け合い」について自分の思いをまとめる。これらの活動を通して、助け合おうとする道徳的価値を高めることができると考える。

2 実践の概要および結果と考察

(1) 相手の立場や気持ちを理解しようとすることができたか。

ア 実践の概要

道徳1として、資料「のれたよ、のれたよ、自転車のれたよ」で、目の不自由な主人公美由紀と母親とのそれぞれの気持ちや立場を考える発問を中心とする授業を展開した。まず、1人で自転車に乗る練習をしている美由紀の気持ちとそれを一つも手助けしないで見守っている母

親の気持ちをそれぞれワークシートに書き込んだ。次に、お互いの立場や気持ちをそれぞれの立場になりきって考えさせ、最後にそれを見守っていた母親の気持ちを考えて母親宛てに手紙を書くという授業を展開した。

イ 結果と考察

導入では、実際に目をつぶって学用品を当ててみたり、「目をつぶったまま、給食を自分の所に運べるかな。」と問いかけたりして、目の不自由な状態を考えさせた。すると、児童は「とてもできない。」「こぼしちゃうよ。」とその状態で行動する難しさを感じた。そのため、美由紀が自転車に乗る難しさや乗れたときの喜びなど、美由紀の気持ちは比較的容易にとらえることができた。母親の気持ちについては初め、「美由紀のお母さんの気持ちはわからないよ。」と児童が答えたように、今まで他の立場から考えた経験がなかったため、なかなかとらえられなかった。しかし、自分の母親になったつもりで考えてみようというアドバイスをしたら、だんだん母親の気持ちを考えられるようになってきた。資料1は、授業の最後に書かせた母親に宛てた手紙の内容を整理したものである。このことから、児童は美由紀や母親の気持ちを考えて手紙を書いており、特に半数近くの児童が、母親が美由紀のために厳しくしていたという気持ちを母親になったつもりでとらえることができた。美由紀のことは、自分と同じ子どもの立場としてとらえやすいが、普段からあまり考えたことのない母親の立場については、母親の気持ちを問う発問を中心に授業を展開することによって、母親の立場に自分を置き換えることができたと考えられる。

資料2からわかるように母親が美由紀のために厳しくしていたという手紙に書いていたA子は、自分の生活を振り返り資料3のように感想を書いた。母親に宛てた手紙を書かせることによって、美由紀の母親の本当の気持ちを考えることができ、自分と母親の関係を見直し、母親の自分に対する深い愛情を推し量ることができた。加えて自分中心に物事をとらえるのではなく、相手がどんなことを考えてそのような行動をしたのか、内側に潜む心に目を向けることができるようになったと考えられる。

このことから、道徳1の授業を通して相手の立場や気持ちを理解することができたといえる。

資料1 母親に宛てた手紙の内容

母親の立場で気持ちを考えた内容	美由紀の立場で気持ちを考えた内容
美由紀さんのために厳しくしたんですね。(15) 美由紀さんが自転車に乗れて本当によかったですね。(10)	お母さんわたしのためにありがとう。(3) 美由紀さんは、目が不自由なのに乗れるなんてすごい。よくがんばっていた。(9)

()内の数字はのべ人数

資料2 A子の母親に宛てた手紙の内容

この話を聞いて、みゆきさんは、すごいなあと思いました。おかあさんがきびしくしたから、みゆきさんはきつとじてんしゃにのれたんだと思います。

資料3 A子の自分の生活を振り返っての感想

わたしが、漢字をまちがったとき、お母さんが「もっと練習して。」とっておこったときは、もっと漢字をおぼえてほしいからおこったんだなあと思った。

(2) 友だちを信頼することの大切さに気づくことができたか。

ア 実践の概要

総合的な学習の時間において、福祉のテーマに基づいて「ブラインドウォーク」を実践した。この学習では、三人一組になってそれぞれが、目の不自由な人の立場、案内する人の立場、それを見守る人の立場を体験した。目の不自由な立場では、連れて行ってもらいたいところを校庭の中から決め、目隠しをして歩いた。案内をする立場では、目隠しをしている人の気持ちを考えて常に相手が快適に感じられるよう、まわりの様子がよくわかるような工夫をするように児童に促した。見守る立場では、目隠しをしている人が安全に行動できているかを中心に見て

いくように声をかけた。ブラインドウォーク直後、体験しているときの気持ちをプリントに書き、その後、自分たちの行動の様子をビデオで視聴して、感想を書いた。

イ 結果と考察

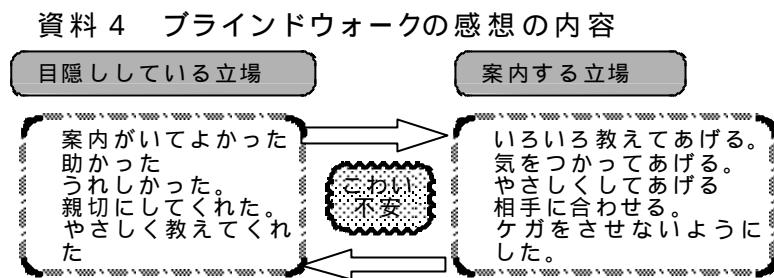
初めてのブラインドウォークで、児童は、目隠しの友達のことを考えて、工夫して行動をしていた。例えば、いつもより声を多くかけたり、手をとってまわりの物を触らせたり、1人では手が足りないと思ったときは、もう1人の友達と力を合わせてブランコに乗せたりして、目隠しをしている子が「助かった」「うれしい」と思うような行動をとることができた。ブラインドウォークでは、目隠しをしている立場で感じた不安・恐怖に対して、案内する立場が不安を取り除く努力をしている。そして、案内する立場になると相手の様子を見て、「助けてあげよう」という気持ちになって行動をしているといえる。

このことによって、目隠しをしている立場では、不安な気持ちが解消されて、「案内してくれてよかった」「親切にもらって助かった。」などの気持ちをもつことができた。(資料4参照)

その後、自分たちのブラインドウォークをビデオで見て、目隠しをしている人は「案内する人を頼っている」(26人)「安心している」(8人)「信用している」(1人)などの感想を書き、案内する人の様子をほぼ全員が「やさしくしている」と記している。体験中は気づかなかった、自分たちが友達を頼っている姿をビデオ視聴によって、客観的にとらえることができた。

ブラインドウォークで、言葉をかけてもらってうれしかったし、自分もかけてあげないと相手が危ないと感じたA子は、ビデオ視聴後、資料5のような感想をもった。言葉の必要性に着目しただけでなく、自分が相手を信用している姿をとらえることができた。B子は、友だちが頼っている姿から、自分も頼っていたことを思い出して自分を振り返ることができた。

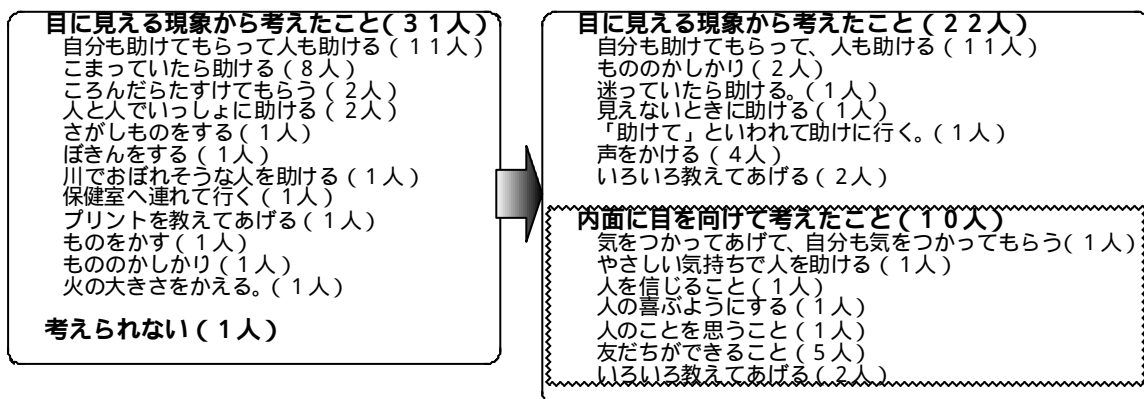
資料4 ブラインドウォークの感想の内容



資料5 A子とB子のビデオ視聴後の感想

- 信用してくっついていて、手を引いてくれて安心してた。細かくいっていた。やさしく「どんぐりだよ」とかいってあげていた。
- とても目かくしている人はこわそうで案内してくれている人にとってもたよっていた。自分もとてもこわくて暗くてずーっと くんたよっていました。

資料6 「助け合い」のイメージの変化



資料6 からわかるように、ブラインドウォークの前後に、「助け合い」についてのイメージ

を考えたところ、体験前は、今までの少ない自分の経験からのみ「助け合い」について考えていたので、言葉にするまでに非常に時間がかかった。しかし、体験をしたことで「助け合い」についての考えを広げ、どんなことが「助け合い」なのか具体的なイメージをつかませることができた。さらに、相手の気持ちを意識して活動してきたため、行動の核となる心情の部分に目を向けて「助け合い」について考える子が出てきた。これは、体験をしたことで活動中に気づいたことや感じたことに、初めて目を向けることができたと考えられる。

このことから、ブラインドウォークを通して、友だちを信頼することの大切さに気づくことができたといえる。

(3) 相手の立場を考えて、助けようとする気持ちをもてたか。

ア 実践の概要

道徳2として、導入では、前時のブラインドウォークを想起させ、助け合いのイメージマップを2枚提示し、今まで自分が体験してきた助け合いを明らかにした。次に、資料「いのりの手」を用いて、共に絵かきを志していた登場人物の行動の理由や気持ちを考えた。ハンスが、絵の勉強をさせるためにデューラーにお金を送り続けていた気持ちをとらえると共に、画家になったデューラーが、なぜ手を描かせてくれと言ったのか、その理由を考えてワークシートに書かせた。そこで、二人の気持ちや立場を比較して、お互いが相手のことを考えながらも異なる形で助け合いをしていることに気づかせた。そして、自分の生活を振り返り、これから自分ができる助け合いについて考えた。最後に学級の木（助けてもらった木、助けてあげた木）を育てていくことを提案する授業を展開した。

イ 結果と考察

導入では、児童はデューラーの自画像を見て「すごい絵を書く人だなあ。」「なんて人なの。」など、デューラーにとっても興味をもった。資料から、画家になるためにお金を送り続けてくれたハンスの存在を知り、デューラーの気持ちを十分考えることができた。そして、資料7の感想から自分を犠牲にして働いてくれたハンスに、今できる精一杯のお礼をしようとしているデューラーの気持ちを、ほぼ全員の児童が考えることができた。ハンスに直接的に返すだけでなく、世の中の人に広めていくことも間接的なお礼となっていくことだ、ととらえた児童も見られた。()の感想)これは、児童がハンスの気持ちや、ハンマーを持たせたら天下一品という立場をよく考えて、どのようにしたらハンスが喜んでくれるのか考えられた結果である。また、デューラー自身の立場も考えて、今デューラーができることをよくとらえられたと考える。

二人の行動をとらえた後に、これからの自分の行動を考えたところ、資料8のように、助けようとする対象が、たくさんの周りの人に向いていることがわかる。また、他のことで返していこうとする気持ちをもった子もいた。A子は「自分が違う子を助ければ、その子がありがとうという気持ちをもつので、さらに違う子にまで助けようとする気持ちが広がるだろう」と感想をもった。資料9から分かるようにA子は、相手の気持ちを考え、「助け合い」が「1対1」のつながりではなく、「1と1と・・・」と、連続して続くものであると考えるこ

資料7 「いのりの手」ワークシートの感想

デューラーが、手を書かせてくれたという理由
この手のおかげで、絵かきになれたから(19人)
天下一品の手だから(6人)
お礼に書きたい。(8人)
世界に残したい(9人)
すごい絵かきになったから(1人)
親友の手だから(1人)

()内の数字はのべ人数

資料8 これからの自分の行動

助けてもらった人だけでなく、たくさんの人や、ちがう人も助ける。(16人)
他のことで返していく。(3人)
心を込めてありがとうをいう。(3人)
同じ人に同じことを返していく。(4人)

資料9 A子の感想

私が泣いていたら、なくさめてくれた子を助けるんだけど、ちがう子も助けてあげる。ちがう子も助ければ、その子が「ありがとう」と思うから、また、ちがう子を助ける。

とができた。授業の最後に提案した、「助け合いの木」では、自分がしてもらったことや、できたことを紙に書いて木に貼る活動をする事により、「助けること」「助けてもらったこと」を意識することができるようになった。また日常的に行われる自分に対する何気ない行為が、「うれしい」「ありがとう」という気持ちを生み出していることに気づき、助け合いのよさを感じられるようになった。その上、行為そのものにも、質的な変化が見られるようになった。「自分が通れるように、何も言わないのに机をどかしてくれた。」「落ちていたランドセルを拾ってくれた。」「いすが足りないからみんなですわる」など、1対1の行為や物の貸し借りだけでなく、みんなのための行為であったり、自分のやさしい気持ちが表れる行為であったりするようになった。また、学級の木に貼られて数が増えていく様子を見ることで、「助け合いっていいなあ。」という声が聞かれるようになった。

資料 10 学級の木



以上のようなことから、道徳2を通して、相手の立場を考えて助けようとする気持ちをもてたといえる。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

道徳1として、お互いの立場や気持ちを理解するために、母親とその子どもが登場人物となる資料を取り上げたことは、自分にとって身近な関係である登場人物になりきって気持ちを考えることができ、普段は意識しづらい相手の気持ちを深く考えることができた。

総合的な学習の時間における「ブラインドウォーク」において、目の不自由な立場、案内する立場を体験することで、「助ける」「助けてもらう」ことの具体的な経験を積むことができ、「助け合う」ことのイメージを広げることができた。その後自分たちのビデオを視聴することで、自分たちの体験の様子を客観的に見て、体験のときには気がつかなかった行為の裏にある「やさしさ」や「信頼する気持ち」をとらえることができた。そして信頼することの大切さに気づいたことで、道徳2において離れていても信頼している二人の気持ちに入り込み、もっと相手が喜ぶことをしていこうとする気持ちをもつことができた。

道徳2として、今まで自分たちの生活になかったような助け合いの場面で、登場人物の二人の気持ちや行為の理由を考えたことで、自分が今できることを相手や相手以外の人に返し、いこうとする気持ちに気づき、自分ができる助け合いの意識を変えて、いろいろな人が喜ぶことをしていこうという気持ちをもつことができた。さらに、学級の木活動を導入したことは、目に見えない助け合いをみんなで作り上げるよさを意識させることができた。

2 今後の課題

クラスの中では「助け合う」姿を以前より多く見られるようになってきているが、クラスから一歩外へ出ると、まだまだ十分であるとはいえない。今後は、日常の場面で、いつでもどんな相手に対しても自然に助け合いの行動をとれるような児童の育成に努めていきたい。